

広島県立美術館

# 研究紀要

第15号

- 講演会「父・船田玉樹」解題 ..... 永井 明生 1(38)
- 黒川節司の美術活動 ..... 藤崎 綾 26(13)  
—昭和戦前期の広島における美術家支援と美術館構想—
- 染織品の展示と方法について ..... 福田 浩子 38(1)  
—「所蔵作品展 岩崎博染織コレクション受贈記念 シルクロードをめぐる布の旅」の場合—

2012

BULLETIN  
OF  
HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM

No.15

- The way of preparation and exhibition of textiles in Hiroshima Prefectural Art Museum:  
the case of “Commemorating the donation of Dr. Hiroshi Iwasaki textile collection:  
Journey accompanies textiles around Silk Road” (1) 38  
**FUKUDA SIDDIQI, Hiroko**
- Art activities of Mr. Kurokawa Setsuji – Artist support and a construction plan of a museum  
of art in pre-war Hiroshima (13) 26  
**FUJISAKI, Aya**
- Explanation of the Lecture “Father : Gyokuju Funada” (38) 1  
**NAGAI, Akio**

2012

HIROSHIMA PREFECTURAL ART MUSEUM  
HIROSHIMA JAPAN

# 黒川節司の美術活動

## — 昭和戦前期の広島における美術家支援と美術館構想 —

藤 崎 綾

戦前・戦中期に広島で活動した美術関係者のなかには、文化形成に重要な役割を果たしたにもかかわらず、実態を伝える資料の焼失や散逸により、活動の全貌が不明な人々が少なくない。広島市内で医業のかたわら美術品の蒐集や美術家の援助にあたった黒川節司（1890・明治23—1945・昭和20）もその一人であり、筆者は、先年、広島出身の洋画家・鬘光との接点を示す資料をもとに、その活動の一端を紹介させていただいた<sup>1</sup>。本稿では、ご遺族のご協力により、後の調査で明らかになった黒川と他の美術家との交友や支援、及び蒐集品公開の取り組みについて、補足資料を提示しつつ述べてみたい。

### 黒川節司と美術家との交友

黒川は、現在の広島県東広島市福富町出身。岡山医学専門学校に学び<sup>2</sup>、1915（大正4）年1月12日に医師免許を取得。公立広島病院<sup>3</sup>での勤務を経て1919（大正8）年6月1日、広島市細工町12番地（現在の中区大手町）に、内科・レントゲン科の黒川内科医院を開設した。写真館として使用されていた3階建ての建物を買い取り開院、大正時代末には早くも病院を拡張している。



図1 中国新聞社作成『平和記念公園（爆心地）町並み復元図』（部分）



図1は、1945(昭和20)年8月6日当時の爆心地の町並みを復元した地図で、図2はその右側部分の拡大図である。図2中の①が、開院当初からの黒川病院と自宅で、美術品は主にこの建物で展示された。自宅のほか、病院の診察室や待合室などでも公開していたという。②は、拡張後の病院。③には、後述する島本秀吉の理髪院が、④には、美術雑誌『實現』を発行、黒川をはじめ美術関係者と親交のあった文化人・佐伯卓造の佐伯便利社が見える。

図2 黒川病院付近(図1の拡大)

黒川のアート収集は昭和初期頃に始まったようだが、本格的な活動は、経済的に安定し、かつ自室が広がった1933(昭和8)年頃以降と見られる<sup>4</sup>。コレクションの拡大に伴い、美術家や画商との接点も増大したと想定されるが、ご遺族からのご教示や、『實現』をはじめとする当時の報道記事、また、黒川家に設置され、来訪者が名前を記した芳名録、さらには黒川宛の書簡等からその一端が知れる<sup>5</sup>(図3~12・別表)。



図3 中村達吾・芳名録への書込(1931年10月末頃)



図4 丸木位里・芳名録への書込(1931年10月末~11月初頃)



図5 黒川宛・川辺華堂書簡(1931年11月20日)

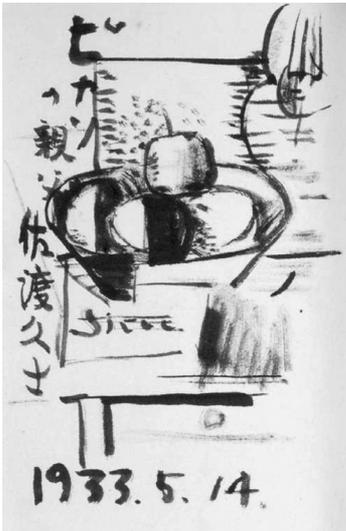


図7 佐渡久士・芳名録への書込  
(1933年5月14日)

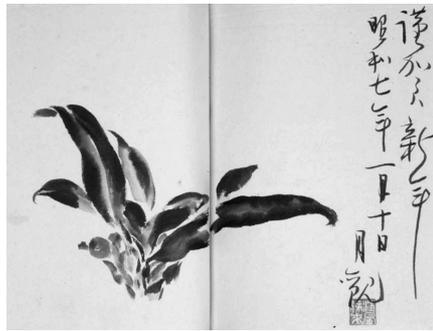


図6 田中月観・芳名録への書込  
(1932年1月10日)

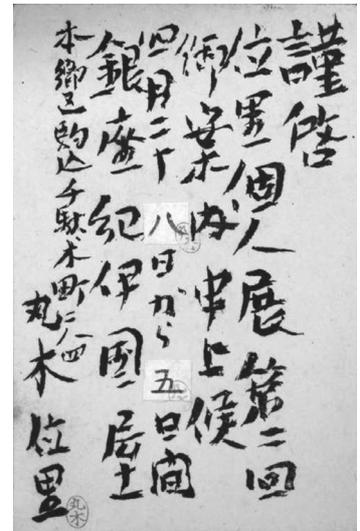


図8 黒川宛・丸木位里書簡  
(1940年4月26日)



図9 黒川宛・近藤浩一路書簡（1944年12月8日付）

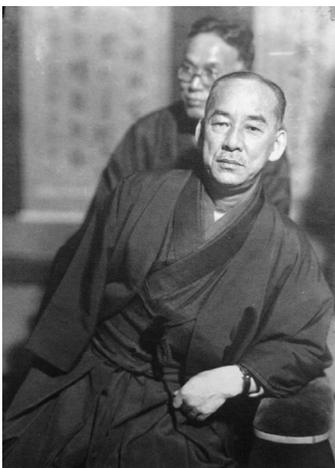


図10 黒川と小室翠雲



図11 黒川と藤田嗣治



図12 黒川と近藤浩一路

表 黒川節司に関わる主な美術関係者

人 名	交友や関係を示す資料・事象
長尾富太郎（潤堂）（文化人・日本画家）	○広島美術院同人（1926年5月）※同院は、黒川が顧問を務めた。 ○芳名録への書込（1931年9月初旬頃） ○書簡（時期不詳：井上雲凌との連名1通）
田中月観（日本画家）	○広島美術院同人（1926年5月） ○芳名録への書込（1932年1月10日） ○書簡（1934年1月4日・1940年2月11日）
福島省三（画家）	○広島美術院同人（1926年5月） ○書簡（1940年か4月13日：1通・1941年6月10日・6月13日）
末永護（1898-1991・洋画家）	○1927-28年、黒川家に居住。黒川の母の追悼文を寄稿：『實現』（1937年3月） ○書簡（1930年4月15日・6月30日・10月15日・12月26日・1931年1月30日・3月9日・11月9日・1932年12月1日・12月24日・1933年1月13日・6月29日・11月18日・1934年6月18日・1935年10月13日・1936年12月17日・1937年2月7日・2月16日・2月21日・3月19日・4月7日・4月21日・11月27日・12月2日・12月18日・1938年3月12日・4月6日・9月18日・9月23日・11月17日・1939年4月16日ほか）
新井謹也（1884-1966・画家・陶芸家）	書簡（1930年12月2日・1931年8月12日・11月10日・11月19日・11月26日・12月9日・12月24日・1934年1月6日・8月23日・時期不詳：2通）
山田説義（1903-1979・洋画家）	書簡（1931年3月11日・8月12日・1932年4月4日・1934年1月5日）
河面冬山（1882-1955・漆芸家）	書簡（1931年5月12日・5月21日・6月3日・6月9日・1932年1月16日・1月21日・1939年1月31日）
川辺華堂（1893-?・日本画家）	○芳名録への書込（1931年11月13日） ○書簡（1931年6月20日・10月23日・11月6日・11月20日・12月23日・1932年1月28日・5月16日・10月30日・1934年1月1日・時期不詳：1通）
三沢三千彦（1900-1982・日本画家）	○芳名録への書込（1931年10月頃） ○1937年1月、玄潮社新年会に黒川らと出席：『實現』（1937年1月） ※玄潮社：片田天玲、川上瀨泉らが組織、丸木位里らが加わった日本画家の団体
野田信（洋画家）	○芳名録への書込（1931年10月） ○書簡（1933年3月15日）
中村達吾（酒造業・画家）	○芳名録への書込（1931年10月末） ○白彩会会員 ○書簡（1942年か：1通・時期不詳：1通）
丸木位里（1901-1995・日本画家）	○芳名録への書込（1931年10月末～11月初頃） ○書簡（1936年9月6日・1937年9月17日・1940年4月26日）
小川千甕（1882-1971・日本画家）	書簡（1932年5月3日・6月7日・7月23日・8月21日・10月6日・10月7日・11月28日・1933年1月28日・1939年4月3日）
近藤浩一路（1884-1962・画家）	○電報（1932年11月25日） ○黒川家に2日間滞在：『實現』（1936年1月） ○書簡（1936年4月9日・4月21日・1937年12月9日・12月30日・1944年12月8日）
鬨光（1907-1946・洋画家）	芳名録への書込（1933年3月15日）
休場実（洋画家）	○芳名録への書込（1933年3月15日） ○書簡（1935年5月23日）
肥後本義夫（1894-1945・洋画家）	芳名録への書込（1933年4月上旬）

佐渡久士（1907-1983・画廊・画材店 洋画家）	芳名録への書込（1933年5月14日）	
柚木久太（1885-1970・洋画家）	書簡（1933年6月24日・7月31日・1934年1月1日・7月28日・1935年8月10日・1939年1月1日）	
安田半圃（1889-1947・日本画家）	書簡（1934年3月15日・3月18日・4月13日・1935年1月28日か：1通・1938年12月31日・1940年4月4日・時期不詳：2通）	
萩谷巖（1891-1979・洋画家）	書簡（1935年6月15日・7月27日・10月15日・1937年4月8日・時期不詳：2通）	
井上雲凌（日本画家）	○1935年末頃、小室翠雲の歓迎会に、伊藤篤城、井上雲凌、黒川、田中頼璋ら出席：『實現』（1936年1月）	○書簡（1939年1月1日・時期不詳：長尾富太郎との連名1通）
小室翠雲（1874-1945・日本画家）		○黒川節司との写真
田中頼璋（1866-1940・日本画家）		
茨木杉風（1898-1976・日本画家）	○黒川家で、藤田嗣治夫妻と黒川夫妻、茨木杉風、古淵唾草らと撮影した写真が掲載：『實現』（1936年7月）	○1936年6月に黒川家訪問：『實現』（1936年7月） ○書簡（1939年1月1日・5月21日）
藤田嗣治（1886-1968・洋画家）		○1936年6月に黒川家訪問：『實現』（1936年7月） ○黒川家で撮影した黒川・藤田の写真（図11）
古淵唾草（画家）		○書簡（1936年9月20日・11月27日・1941年5月14日・5月15日・6月1日・7月5日・8月6日・1942年4月27日ほか）
笠井隆吉（1889-1960・医師・洋画家）	○書簡（1936年6月12日・12月19日） ○白彩会会員	
野村守夫（1904-1979・洋画家）	書簡（1936年9月30日）	
小林和作（1888-1974・洋画家）	○書簡（1936年10月27日・11月3日・11月11日・1939年1月1日） ○白彩会会員	
小野鐵之助（1903-1990・医師・洋画家）	○書簡（1936年11月2日） ○白彩会会員	
和高節二（1898-1990・日本画家）	○白彩会会員 ○書簡（1939年1月1日・11月2日）	
森谷南人子（1889-1981・日本画家）	白彩会会員	
満谷国四郎（1874-1936・洋画家）	満谷国四郎遺作展（1937年3月6日～3月12日 於：上野・日本美術協会）に、生前、画家と親交があったことから、黒川は賛助員に推され、《武蔵野の秋》《初秋》を出品：『實現』（1937年3月）	
落合朗風（1896-1937・日本画家）	1938年2月、落合朗風の追悼座談会（佐伯便利社主催）に、井上雲凌、黒川、佐伯卓造、浜崎左髪子らが出席：『實現』（1938年3月）	黒川家をたびたび訪問していたという。：『實現』（1938年2月）
浜崎左髪子（1912-1989・日本画家）		書簡（1937年6月29日）
佐伯卓造（1881-？・佐伯便利社）		
実本仙（1899-1943・洋画家）	書簡（1938年12月31日・1942年4月28日）	
山下鉄之輔（1887-1969・洋画家）	書簡（1939年1月1日・時期不詳：1通）	
上永井正（1899-1982・洋画家）	書簡（1940年10月12日）	
林倭衛（1895-1945・洋画家）	書簡（1940年12月29日・1941年2月2日・2月12日・4月8日・7月10日）	
鳥海青児（1902-1972・洋画家）	書簡（1941年6月9日）	
須田国太郎（1891-1961・洋画家）	1941年11月頃、須田の広島文理科大学で講義に合わせて、黒川が所蔵品を展示：黒川自筆原稿（1943年頃）	
村井辰夫（1904-1998・彫刻家）	書簡（1941年か：1通・1942年11月22日）	

※黒川との接点を確認できる記録をもとに時系列で記した。生没年不詳の場合はとくに明記していない。

新井謹也、小川千甕、落合朗風、川辺華堂、近藤浩一路らの日本画家や、鳥海青児、林倭衛、藤田嗣治、満谷国四郎、柚木久太らの洋画家、広島ゆかり作家では、鬘光、小林和作、佐渡久士、末永護、田中月観、丸木位里らとの交流が確認できる。なかでも、位里は、「黒川さんが懇意にしていた絵描きの近藤浩一路先生のところによく集まった」「その頃の近藤浩一路先生の絵には大変共鳴したというか、好きだった」と述べ<sup>6</sup>、画家として受けた影響とともに、書簡や写真(図9・12)からもうかがえる黒川と浩一路との親交を回想している。現存資料から確認できる、黒川と交流のあった主な美術家(別表)のうちには、茨木杉風や三沢三千彦など、ほかにも浩一路の弟子が含まれ、洋画家では柚木久太と末永護が満谷国四郎と師弟関係を結んでいる。一方、黒川や和作らと同世代の明治中期生まれの作家に限ってみると、浩一路をはじめ、和作の知人が多いことにも気づく。

山口県出身の小林和作は、日本画を学んだ京都時代、洋画に転向した東京時代を経て、1934(昭和9)年4月に尾道に転居した。ちょうど黒川が本格的な蒐集活動を開始した時期に当たる。転居に際し世話になった森谷南人子は、京都市立美術工芸学校で和作の後輩に当たり、川辺華堂は、同校卒業後に学んだ川北霞峯の画塾以来の旧友<sup>7</sup>、浩一路とは大正初期頃に知り合っていたことが自筆文から確認できる<sup>8</sup>。洋画家では、同じ春陽会に属し、昭和初期とともに渡欧した林倭衛が挙げられる。須田国太郎は独立美術協会入会以来の親友で、小野鐵之助や笠井隆吉とは南人子を介して尾道移転後間もなく知り合った。転居前にも尾道を訪れていた可能性があるともいい<sup>9</sup>、移転の半年前に広島県産業奨励館で開催されたという清水登之、鈴木亜夫ら独立会員の展覧会<sup>10</sup>にも、あるいは和作が何らから関与していたのかもしれない。日本画家・洋画家双方に友人を持ち、画商や美術関係者の知人も多く、作家の支援者でもあった和作との交友は、黒川の後援・蒐集活動にも刺激を与えたと考えられ、互いに影響を及ぼしつつ、ともに交友関係を拡げていったと推測できる。両者の共通の知人を含む広島在住者による白彩会の結成は、その一つの証左であるといつてよいのではないだろうか。

### 美術活動への支援

「広島縣下におけるアマチュアと畫伯、外科産婦人科の醫伯、美術鑑賞家酒造家の主人公、洋畫家の日本畫、日本畫家の洋畫などの乗合船が趣味道にかけては何んでも来いの魚袋庵主人、黒川病院長黒川節司氏の肝煎りで今回新らたに白彩會が組織され七八九の三日間廣島市元安河畔、縣産業奨励館三階で第一回美術展が催されることになった」<sup>11</sup>。

上記のように黒川の尽力により、白彩会が第1回展を開催したのは、1936(昭和11)年11月。会員は、和作が絵画指導を行った小野鐵之助と笠井隆吉(医師)、中村達吾(布野村の酒造家)、長尾潤堂(美術観賞家)、日本画家の森谷南人子と和高節二に、和作を加えた7人である<sup>12</sup>。さらに詳細を伝えているのは雑誌『實現』で、出品目録に加え、黒川による次のような紹介文が掲載されている<sup>13</sup>。

「帝展改組また再改組、南畫院解散辭退、脱退等々と全く梅雨空の様な鬱陶しい中央美術界の現況に之れはまた地方的に秋晴れのすがすがしい面白い團體白彩會が生まれました。」

この年の『實現』には、画壇の混乱が黒川周辺の画家たちへも波及するさまが報じられている。浜崎左髪子は南画院に入選するも同院は間もなく解散、新設の日本南画連盟へ加入することになり<sup>14</sup>、小室翠雲は、平生鈞三郎文部大臣の発言と帝展再改組への抗議として南画院同人らとともに文部省展への不出品を決定する<sup>15</sup>。近藤浩一路は、日本美術院脱退の意を固め、帝展脱退組の動向とは無関係と述べつつも、美術院の態度に不満があるらしいと報じられている<sup>16</sup>。すでに多くの作家や関係者と関わりを持っていた黒川にとって、美術界の紛糾は、「趣味道」の出来事と割り切って看過できないものであったと思われ、白彩会の活動に対する賛意は大きかったと推測される。一方で、和作も準備に余念なく、広報用の会員の紹介文から、作品搬入や梱包に当たる輸送業者の手配や具体的な作業内容など、時に旅先からも黒川宛に細かな確認や依頼の書簡を入れている。展覧会評によると、小野や笠井ら「醫伯」作品は、色彩感覚の乏しさを指摘されつつも、構図の面白さなどが評価され、「自由で素朴」「新鮮」な和作の作品や、「堂々として」「よどみない作風」の長尾、「詩情豊か」に「ゆるやかにやわらかく深み」を備えた比類ない描写の南人子など、和作の友人の賛助出品作とともに、総じて好評を得ている<sup>17</sup>。和作が転居後間もなく始めたという小野や笠井への絵画指導はきわめて熱心なもので、二日に一度は笠井のアトリエに出かけて教授し、静物の材料を自ら持ち込んで、構図まで作っていたというが<sup>18</sup>、約1年半の指導の成果がある程度発揮されたともいえるだろう。小野は、和作との最初の出会いについて、南人子を介して笠井宅で行われたようだと記憶を辿りながら、「小林画伯が春陽会の会員であることなど知ってる筈もなく、正直に言って、笠井先生も私も小林和作なる名前はその時初めて知った位でした」と回想している<sup>19</sup>。前述の白彩会会員の紹介文は、「黒川氏にかいて頂くつもりにして下書きをします」と断り書きを入れ、「紹介文の材料」と題した略歴の草稿を和作が黒川に送ってきている。笠井の欄には、「尾道の外科医で私の友人で学校では一年だけ先輩でした」とあることから、笠井は和作を知るかなり以前から黒川とは懇意であった可能性が高く、同業で旧知の美術愛好家である黒川と和作との間をとりもち、会結成の発端となった可能性もあるだろう。ちなみに、この約半月後、同じく産業奨励館で開催されたのが、鬚光や位里ら広島出身の在京新進作家による第1回藝州美術協会展<sup>20</sup>で、黒川にとっては、既知の画家を含む、若い世代の作家が活躍を見せたこの展覧会もまた、「地方的に秋晴れのすがすがしい面白い團體」の活動と感じられたことだろう。

多忙な医業の傍ら、黒川が多くの美術家と親交をもち、かつ交流を広げていった背景には、美術作品への愛着とともに、制作者である作家に対する厚意に裏付けられた支援活動があった。蒐集美術品の披露や、写生地等に赴く画家のため、当時としてはまだ珍しい自動車を用立てるといった来広時の歓待は無論のこと、現存する書簡類からは、作品購入や制作援助、個展や画会、作品頒布会の開催や協力、他の美術愛好家への紹介など、幅広い後援活動が確認できるとともに、それら好意的な活動に対する美術家の謝意が散見される。単に所蔵品を増やすことに終始するのではなく、作家の活動場所や基盤を作り上げていくことで創作を促す地道なその活動と、観賞の楽しみを人々と分かち合おうとする考え方が、美術を広く社会に浸透させる存在としての美術館の設立構想につながったことは容易に首肯できる。戦争の開始により、この構想は残念ながら実現しなかったものの、戦争の時代になされた蒐集品の公開展示の試みについて、最後に略述しておきたい。

## 蒐集美術品の公開と展示

戦前の広島市内には、明治期に開設された広島県博物館や、旧藩主・浅野家の別邸敷地内に大正期に開館した観古館に代表される博物館施設があった<sup>21</sup>。これらに続き、1915（大正4）年に開館するのが、現在は原爆ドームとして知られる広島県物産陳列館（後、商品陳列所、産業奨励館と名称変更）と、広島県高等師範学校附属教育博物館である。前者は白彩会展や藝州美術協会展の会場となったが、後者の博物館において、戦中期に黒川コレクションによる展覧会が開催されている<sup>22</sup>。黒川は、蒐集した美術品を自宅のほか病院の診察室や待合室に展示しており、また、所蔵品を展覧会に貸し出すこともあったが<sup>23</sup>、自宅外でのまとまったコレクション公開は、おそらく初めてではなかったかと思われる。時勢によるものか、現段階では新聞や雑誌等での報道は確認できないものの、会場で撮影した写真が現存しており（図13）、写真裏面にある陸軍運輸部の検閲印の日付が1941（昭和16）年11月22日であることから、この時期の開催と見られる。



図13 黒川コレクションの展示風景  
（1941年11月頃・広島文理科大学  
附属博物館）

展示についての情報を得る、わずかな資料の一つが黒川自筆の原稿だが、その中に、作品の公開契機に触れつつ、自らの蒐集品のうち油彩画がもっとも知られた理由を述べた次のような一文がある。

「一昨年秋、須田国太郎先生の美学課外講座が文理大で開かれた際、全学博物館に明治初期より中期末期大正昭和と著名作家の制作□二十余点に彫塑数点を交へて公開したことに始まった様です」  
（※□は不明文字）

ご遺族によると、展示作品には、浅井忠や久米桂一郎、古賀春江や中村彝らの作が含まれていた可能性があるといい、近代日本洋画の代表的作家の作品が観賞できる貴重な機会であったと思われる。

黒川は、油彩画のほかにも日本画や彫刻、工芸作品等、幅広く所蔵しており、なかでも中国風の櫃形の鞆の蒐集に凝っていたというが、戦後に発行された文献のなかにも「油絵愛好者として知られた黒川節司氏」<sup>24</sup>などの言及があり、上記の展覧会が人々に与えた強い印象を知ることできるだろう。

須田国太郎の美学課外講座と、上記展覧会の会場となった「文理大」（＝広島文理科大学・図14）は、1929（昭和4）年に設立。1918（大正7）年に設置された高等師範学校の徳育専攻科を前身とする、広島県における最初の大学で、「東京文理科大学とともに、東・西における教育養成機関の中枢と目され」、原爆の被害を受けるまで、中国・四国地方の文教の中心として活動した<sup>25</sup>。同大学は、現在の広島市中区千田町に位置し、後の広島大学文学部、理学部、教育学部の一部の基礎をなすことになる<sup>26</sup>。

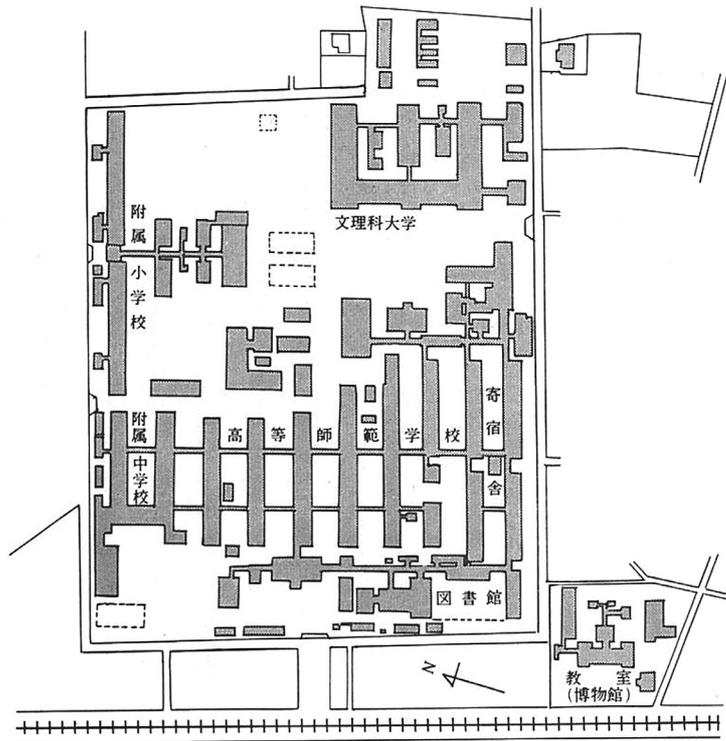


図14 広島文理科大学平面図  
（広島文理科大学創立五十周年記念事業会編『広島文理科大学創立五十周年』1980年 p. 3より転載）

文理科大学の敷地内には、附属の小・中学校や高等師範学校があり、教育博物館は図14でいうと右下、電車通りに面した正門を入れて右手に位置している。開館したのは1915（大正4）年11月13日。かつて附属学校が使用していた旧土木監督署の建物と、永懐閣という煉瓦造の建物からなっていた（図15）。

教育博物館の建築は、もともとは高等師範学校同窓会・尚志会により大正初期に計画されていた。間もなく、旧土木監督署の土地と建物が教育博物館として利用可能となり、計画の変更を余儀なくされたものの、貴重品等を陳列する耐火性の高い建物の必要性等から、同会は新たに永懐閣を建設したのだという<sup>27</sup>。原爆により多数の資料が焼失したため正確を期すことは困難

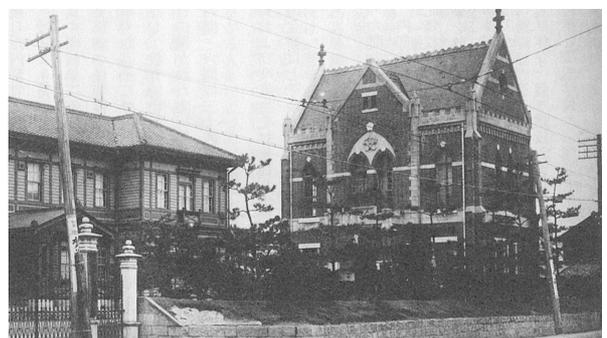


図15 教育博物館（右側が永懐閣）（100周年記念誌編集委員会・平田敏文編『尚志百年』尚志会常務理事・岡田孝章発行 2007年 p.12より転載）

だが、建物内部の写真（図16）には、会場写真（図13）と調度等の共通性が見られることから、黒川コレクションの展観は、永懐閣でなされたと考えることができるのではないだろうか<sup>28</sup>。

高等師範やその敷地内では、それ以前にも美術展が開かれたことがあり、明治末頃にはヨーロッパ留学から帰国した呉市出身の洋画家・南薫造の滞欧作品展が<sup>29</sup>、大正初期には広陵美術展が、それぞれ開催されたと報じられている<sup>30</sup>。



図16 永懐閣貴賓室（前掲『尚志百年』口絵より転載）

博物館施設が乏しく、かつ油絵制作者も少な

い明治期において、数少ない洋画家の多くは、師範学校の美術教師であった。彼らが所属する広陵美術協会が、展覧会場として師範学校内の建物を利用するのはごく自然なことであっただろう。しかし、大正から昭和にかけて、広島県物産陳列館や福屋百貨店など、展示可能な大型施設が徐々に整備されるとともに、同所での展覧会開催はほとんど確認できなくなる。一方で、同博物館は、教育関係の参考資料や機器類の陳列室のほかに、教育目的に限り一般にも使用可能な集会室等を設けるなど<sup>31</sup>、学術的性格は維持しつつ、社会にも一定程度開かれた施設でもあった。黒川コレクションの会場となった背景には、学内で実施する美学講座との連動という目的に加え、これらの歴史的経緯や建物の公的な位置づけも関わっていたと思われる。

以上のように考えると、須田の美学講座は、大学関係者のみならず広く一般を対象とし、かつ近代日本洋画に関する内容だったのではないかとも思えるが、現段階では関連資料がなく、詳細は不明である。ご遺族のご教示によると、厳密な時期までは不明ながら、文理大での講演依頼を受けた須田が、かつての講義録を参照しつつ、意気込んで準備していた様子が印象深く記憶に残っているといい、講演終了後は周辺を写生して回ったようだったという。講演したと目される三か月前、須田は、尾道の和作を初めて訪問したとされている<sup>32</sup>。あくまで推測の域を出ないが、このときに具体的な講演依頼がなされた可能性もある。須田は、同年3月に「絵画に於ける理論と実際」と題し、帝国美術学校で講演を行っており<sup>33</sup>、これを終えて後、文理大での講義準備に専心したと見るのが自然であろう。

須田はまた、1942（昭和17）年8月にも来広している<sup>34</sup>。満州国美術展覧会で審査員を務めた帰途に立ち寄ったもので、宮島<sup>35</sup>や岩国を経て16日に広島市内に入った。現在の中区紙屋町辺り、路面電車が回ってくる交差点に程近い理髪店を訪ねたといい、位置関係からすると、島本理髪院（図2-③）を来訪したと思われる。隣家まで来つつ、黒川に会っていないのは、おそらく往診等で多忙だったためであろう。店主の島本秀吉は、「大正末期以来、同業者間のためにあらゆる進歩的な意見を広島県当局に具申し、理容師の向上に力を尽し、最後には同業者より押されて市会副議長となってその政治的手腕を認められた」<sup>36</sup>という社会的影響力の強い人物であったが、一方で、築地小劇場の広島・初来演の際には関係者が同家に立ち寄っていたともいい<sup>37</sup>、早くから芸術家とも近い関係にあったと見られる<sup>38</sup>。島本の歓待を受けた後、須田は尾道の和作を訪問、間もなく帰郷している。

以上のように、黒川コレクションは、須田の講義に際して教育博物館で短期間公開されたが、本来であれば、黒川の私設美術館で展示されていたはずであった。自筆原稿のなかで、「實は広陵の地に本邦作家の油繪を最古きものより最新しきものに至るまで一堂に集めた謂はゞ美術館の建設が年来の望みでした」と述べ、日中戦争が起きていなければ、「貧弱でも兎にも角にも實現して居た筈なのです」とも記して、実現性が高かったことをうかがわせる。順調と見えた蒐集活動も、医師という職業柄、旅行のできない身で苦心することが多かった述べる一方、中国地方にある一大コレクションである大原美術館には学ぶことが多かったようで、「大原コレクションには兒島虎次郎氏によって集められた多くの泰西名画が地方藝術文化に大変効顕して居ることを感じました」と記し、また、ご遺族によると、黒川が蒐集の主対象を「本邦作家」としたのも、先行する「泰西名画」の充実した大原コレクションとは異なる分野で、自身のコレクションを築こうとしたからだという。

美術館構想を断念せざるを得なかったことは、黒川にとって極めて遺憾なことだったと思われるが、地方の芸術文化の向上に寄与しようとする意志が表れた「私は美術品藝術品を大切に次の時代に持ち送ることの責務を痛感したのです」という記述を目にするとき、計画の頓挫とともに、終戦を待たずに途絶した活躍が改めて惜しまれてならない。

大正から昭和戦前期の広島には、文化形成に重要な貢献をした美術関係者が少なくないが、黒川はその一人として、特筆すべき活動を行った文化人である。活動の解明にはいまだ遠いが、当時の広島美術状況を少しでも明らかにするべく、大方のご教示を賜れば幸いである。

#### 【謝辞】

本稿をなすにあたり、黒川節司ご遺族・菅原桂子氏、須田国太郎ご遺族・須田寛氏、ならびに調査当時の尚志会事務局長・岡田孝章氏に多大なご協力、ご教示を賜りました。末筆ながら記して御礼申し上げます。

#### 【註】

- 1 拙稿「鬚光と広島『生誕100年 鬚光展』図録 pp.18-19。同展は、2007年3月－10月にかけて、東京国立近代美術館、宮城県美術館、広島県立美術館で開催
- 2 以下、黒川節司の略歴及び病院の概略は、黒川が1934年1月31日付で広島県医師会長および広島市医師会長に提出した『診療所開設届』及びご遺族のご教示による。
- 3 現在の県立広島病院。1877年5月、公立広島病院として公立医学校内（広島市水主町）に設立
- 4 ご遺族のご教示による。
- 5 芳名録は1931年8月頃から1932年6月頃までと、同時期から1934年頃の各時期に使用された二冊が現存する。書簡の概要は、別表を参照されたい。
- 6 丸木位里『丸木位里画文集 流々遍歴』岩波書店 1988年 p.36
- 7 小林和作『春雪秋霜』求龍堂 1967年 p.37、p.86
- 8 小林和作（前掲書）p.80、高橋玄洋『評伝小林和作－花を見るかな』創樹社 1985年 pp.116-117
- 9 尾道市立美術館・宇根元了氏のご教示による。
- 10 池田三千恵『ピカソ画房 佐渡久士』ピカソ画房 2009年 p.36に、佐渡が清水登之らと会場で撮影した写真が掲載されている。また、1934年1月1日の黒川宛鈴木重夫書簡が現存。同展で黒川と鈴木が知り合った可能性がある。
- 11 「揃った同人 第一回美術展 白彩會の催」『大阪毎日新聞』（広島版）1936年11月6日13面

- 12 「白彩會の初展覽會」『大阪朝日新聞』（広島版）1936年11月6日 13面
- 13 「千紫萬紅の綾織りなす 白彩會展覽會」『實現』（1936年11月）p.14. なお、目録によると、小野：油彩画12点、笠井：油彩画12点、和作：油彩画5点・日本画9点、中村：6点余、長尾：数点、南人子：日本画7点、和高：数点、賛助出品として梅原龍三郎、曾宮一念、林重義、林武の各1点ずつを加えた55点余の出品があった。
- 14 『實現』（1936年6月）p.5、同（1937年1月）p.29
- 15 『實現』（1936年7月）p.16
- 16 『實現』（1936年7月）p.16
- 17 「白彩會展」『實現』（1936年12月）p.22
- 18 高橋玄洋（前掲書）p.149
- 19 高橋玄洋（前掲書）pp.148-149
- 20 実現社主催で1936年11月22日-26日開催。巖光、中川為延、野村守夫、船田玉樹、丸木位里の作品を展観した。
- 21 広島県の博物館史は、倉橋清方「広島県博物館略史」（『國學院大學博物館學紀要』第15輯 1991年 pp.10-31）に詳しい。
- 22 同博物館は、広島文理科大学の開設により、1929年に広島文理科大学附属教育博物館と館名変更し、1942年以降、廃館したとされている。：倉内史郎、伊藤寿朗、小川剛、森田恒之編『野間教育研究所紀要別冊 日本博物館沿革要覧』財団法人 野間教育研究所 1981年 pp.300-301
- 23 『明治美術名作大展示会』（1943年2月10日-2月28日・東京美術館）に、原田直次郎の《ガブリエル・マックス像》を出品。同展は、「皇太子継宮明仁親王殿下御誕生を記念し奉り、さきに東京市では多年要望の日本近代美術館を建設し、近代日本文化の結晶たる美術品を常時展示することに決し」、その準備として東京市と朝日新聞社の共同主催により開催された大規模なもので、「出陳作品は畏き邊りより御貸下賜はりたる御物十八點、高松宮、久邇宮、北白川宮各宮家よりの御貸下品並びに帝室博物館、文部省、東京美術學校をはじめ、全國各方面の所藏家から特別の好意の下に蒐集した門外不出の逸品ともいふべき三百十餘點、いづれも明治聖代の日本畫、洋畫、彫刻、工藝の代表的名作」と序文に記され、日本画139点、油彩画118点、彫刻22点、工芸47点の図版を図録に掲載する。：皇太子殿下御誕辰記念 日本近代美術館建設 明治美術名作大展示會発行『明治美術名作大展示會圖録』便利堂 1944年
- 24 薄田太郎・著／福井芳郎・装禎『続がんす横町』たくみ出版 1973年 p.44
- 25 広島市役所編『新修広島市史』第4巻 1958年 p.422
- 26 広島大学文書館編『広島大学の歴史』（改訂第3版）2008年 p.2
- 27 仲新・石川松太郎編『創立四十年史（広島文理科大学 広島高等師範學校）』第一書房 1982年 pp.186-191
- 28 なお、教育博物館は、1929年に改造・新築されたが（広島文理科大学創立五十周年記念事業会編『広島文理科大学創立五十周年』1980年 p.10）、現在までのところ、改築後の建物内外の写真は未見である。
- 29 『美術新論』（1929年10月）p.51
- 30 1915年4月25日-5月5日まで広島高等師範附属中学校寄宿舎で開催。同年から終戦までの広島美術界の動向は、出原均編「年譜」（『広島美術の系譜-戦前の作品を中心に-』展 広島市現代美術館 1991年）に詳しい。
- 31 『創立四十年史』（前掲書）pp.189-190
- 32 8月19日。岡部三郎『叢書「京都の美術」I 須田国太郎資料研究』京都市美術館 1979年 p.118
- 33 3月4日に実施。『日本美術年鑑』1942年 p.82
- 34 以下の広島滞在状況も含め、宮島（広島県廿日市市）から須田に同行された、ご遺族のご教示による。
- 35 このときに取材したものでどうかは不明ながら、須田が宮島を描いた作品が蘭島閣美術館に収蔵されている。：同館学芸員・山崎由香氏のご教示による。
- 36 『続がんす横町』（前掲書）p.160
- 37 薄田太郎・著／福井芳郎・装禎『がんす横町』たくみ出版 1973年 p.107
- 38 さかもとひさは、「広島県安芸風土記V 広島シュールレアリスム事件1」のなかで、広島のアンリ・ルソーと呼ばれた洋画家「島本徳三（床屋のトクさん）」について、同じく広島の画家・山路商と協力して、本通り革屋町の島本理髪館につづく2階長屋を画家・実本仙に世話したと記しているが、徳三と島本秀吉との関係は現在のところ不明である。

（ふじさきあや／当館主任学芸員）